

# イデア IDEAll

小泉友美 Koizumi Tomomi



# 目次

|                        |   |
|------------------------|---|
| アイデア IDEA 続編 . . . . . | 1 |
|------------------------|---|



## イデア IDEA 続編

忘却の天蓋

琴の彷徨

盲目のキューピッド

渾沌の新生

老いても堂々とした幾本もの巨木が天上へとそびえ、その樹々の端は細かく掌のように裂けながら、この見事な天蓋を支えている。楕円形天蓋内部は、あまりにも複雑な立体形状となって入り組み、小さな円や正三角形といった単純幾何学図形で渾然一体となり、希望、純粹性、栄光、希望の純白、創造性、魂の不死を示す青、紅、黄、黄金といったすべての色が上へ上へと昇りつめてゆく、この多彩で多様な徴は、柱のいたるところに彫られ、その記憶を留めるために。おどろおどろしい豪華絢爛の錯覚世界。血の凍った呼吸をすることなく、エネジィを取り戻したいかのように、その勇気、その恥じらい、その熱気に群れてゆく蜂の巣。花から花へと、密かに眠る黄金の蜜を探して、あちらこちらへと飛び交ってゆく。各柱を囲む雲がうねっては、天上から降りそそいで来る一筋の光は黄金の鎖であり、しだいに円く四方に広がって満ち溢れてゆく。中央のカップルドコラムに上から下へと、水の波紋が細かくさざめき、落ちてゆく。光の極みにおいての、まさしく光の中の光。究極の心奥底において揺らぎ、泳がせられる。純白の光に揺れ重なり合って識られる。ハリエンジュの黄金の鋭いとげとげ、黄金の木漏れ日を封じた樹脂の苦味は、悔い改めや苦悩といったところの腐敗を阻止するため。ぶんぶんと呻きたてる蜂と鳥の群れ、麗しいような女人の姿が蜃気楼のように薄く、濃く、点々が集められてゆき、ひとりきりの夢想の中、まるでこれから生を捨てゆく魂に気づかされるように。すでに体温を失ってしまった身体の口へと飛び入るこの蜂によって、まるで生の息吹を取り戻すかのように。目、鼻、口、耳のかたちはあまたの傷、皺に埋まり、呼吸の息でかすかに上下し、虚ろに見開かれたままのまなこ。足元には四つの臃げな、うねうねとした長いものの影、三本の尖った先端は湿った土に喰い込むままの影、乱雑な上下の歯型の影。怒り狂ったうながみの影。いずれも光なくどす黒いままに、呻き、吠えてている。筋肉が劣ろえて、だらしなくさがった両腕に、力なく抱きかかえられたままの、遥か遠くから、今ここに駆け走ってくるものに、丸い純白の翼を刈りとられてしまう。勢いよく生えはじめた、青灰色のくるくるとして艶やかなその巻き毛は、踵に流れ

落ちてゆくままに。押されて、倒れるままに、老いたその背中を飛び越えてゆく、小さな両踵に生えた翼。その斜めにかられた前髪を風に揺らすまま。

とらえられるのであれば、とらえてみよ、今、この瞬間に。

湧きあがるように、頭上には暗い炎を燃やして、星々の輝きは額に灯る。その陰鬱な示しは、背後に永遠に繰り広げられている太陽、水星、木星、金星の惑星群の運行によって、過去、現在、未来が表現される。細やかな時の刻みとともに、ゆっくりと萌えあがる緑の野は、すでに黄土色の衰えをみせて、あまたの透明な泡から生まれてゆく、小さな私たちの命は、口を開いて言葉を綴るもの、その真偽ははかりしれないでいる。生まれての若さはすでに老いをみせてゆく。深く、どこまでも暗い足元を濡らしてくる水色の氾濫に、不機嫌に眉根に深い皺を寄せながら、すでに痛めてしまった右足をひきずるままに。自由に身動きのとれないことの焦りと苛立ちを覚えて、内から湧いてくる赤黒い暴力と怒りは、竜巻きのように、ぐるぐると回転してゆくなかにその身を投じてしまった。シからシには、土星がめぐり、ドからドには月がめぐり、レからレには水星がめぐり、ミからミには金星がめぐり、ファからファには太陽が輝いている。これらの恒星は天の下にあってまた、天と異なる動きをみせて後退してゆくことの天の支配はまぬがれない。この長く繁栄を極めている城の塔に、まどろみから少しずつ覚めている老いの身体から皺が伸び、肌に弾力が溢れてきていた。光薄れる夕べとなり、夕陽の沈んでゆく山脈の彼方から、半円の月の輝きのさしそめ、星々も波間に行き交えば、天上の輝きに映え、やがて星影の移るがままに、潮の流れも変わりゆき、考えてみればこのすべての惑星、太陽が軌道を進むにつれて、凄まじい音をたてて、進んでゆく、何気なくおかれた右掌から奏でられるのは、とても哀しげで重々しい音色で、星々の輪が波のように押し寄せつつ、横へと上下になめらかに動いてゆき、この音は作り出されて、かくしてまた、高い音が低い音といろいろな混ぜられてゆき、まこと、これほどの勢いのある、あまた勢い打ち進められて、おのずと端なる音の一方が高ければ、もう一方は低きものとなって押し寄せてくる。右の掌の演奏によって二本の弦はぶちんと音をたてて切れてしまい、傷から流れてくる真紅の血のほとばしりは、内面から湧きあがってくる、いのちをよみがえらせる。二つの掌を、表裏重ね合わせて演奏すると、さらに二本の弦が断ち切れても、かつ、音色は止むことなく、四分の三の四度、三分の二の五度の音程、九分の八の音の天上の音楽は、上昇し下降が繰り返される音階で構成されてゆく。左掌のみの演奏は、薄紅色の湯気を発生させるまま、雲の形を彩どりながら、豊かな長い髪をたゆませる女性の姿を浮かびあがらせて、鳩と鷺が竪琴の両脇に育ち、月桂樹に留まって、その常緑の枝は永遠のいのちを約束する。両掌を手放して、琴が足元に落下してゆく時に奏でられるのは、哀しみのリディア調であり、お互いに矛盾して対立するあらゆる諸物は、あまりに雑然として、生と死、湿と暖、相反撥するものも協和して、窮玄なる美の調和が生起してゆく。何処までいったとして、如何なる途をたどったとしても、この音階の限界に行きつけない。その道に果てしなく深く、落ちてゆくのみ。真っ二つに裂けた琴のかわりに、掌に落ちてきたのは、遠く、波の穂を踏んで海を渡ってきた、非時の香の木の実。この陽光と豊穡の地に。暖かなオレンジ色は、二つの種子をはじけだして、二つの翼を背に生やした愛の天使は盲目のままこの世にこうして誕生した。

乱れるままのくるくるの巻き毛の頭上には、真紅の血が滴るような薔薇の冠。目にも鮮

やかな緑々とした庭で、今、誕生というまどろみから覚めた。片手には、真っ二つに見事に折れた琴が握られており、空いたもう一方の掌には二本の純白の矢を持ち、銅と象牙の矛先からは、薫り高い雫がしたたるままに。純白の矢は、美、簡潔さ、率直さ、同情心、真っ黒な矢は、醜さ、恥、絶望、奇妙さを表現している。美とは視線を通して生まれる光。愛は主張する。我は盲目なり。愛はおのれを盲目にする。布で覆われた両眼の外に顕れない透きとおった瞳は、精神的な愛に通じ、その反対の肉体的な愛は品位を貶める。幾度も幾度も、その矢先を心臓に突き刺して、ついには奥へと突き通してしまった。一気に矢を引き抜くと、心臓もすべて一緒に外へと引き出されてしまい、前方から愛の矢から放たれた愛の炎によって全身は包まれて、炎上されてしまった。その苦痛はあまりに激しく、痛い。あまりの苦痛に大きな呻き声をあげてしまうと、なんとも甘美なカオスが広がってゆく。いつの間にか、二つに折れた琴は、見事に一つの曲線をなす弓を形どり、愛の矢が放たれて、見事な光の動きはすべての魂を燃えあがらせる。恍然たる美に包まれながら、愛の嘆きはいささかも消滅せずに、ますます燃えさかる焦燥感に駆られるのは、まさしく天上からの恩寵である。立ち並ぶ、一切の神像を潔く、捨てさせて、後を決って振り返らずに進んでゆけば、灰色の風は花々を咲かせる吐息となり、すべての万物がすすくと育ってゆく。この密やかな魂の奥深くにおいての、不思議な秘事が成立してゆくこと、調和は乱れに乱れて、人里離れた洞窟に滴り落ちるままの小清水、鮮黄なる蜂蜜の甘さは無花果の甘き果汁に絡み合って様々なる草花がその華を競い合って、芳しく立ち昇る香煙のけむる中、美にとり憑かれた。左奥の泉は、戦士した兵士たちの指から咲き誇るカーネーションの花、溺死したナルキッシスの紅い唇からは水仙の花、随分と後方には光輝く太陽神に憧れているクリュティエが光輪に焦がされてゆく向日葵と、同じく、太陽神にあんなにも愛されて、嫉妬をかけてその胸に矢を放たれつ殺されたヒアキントスが、紫色のヒヤシンスとして咲き誇っている。花の女神フローラは春風ゼファに抱かれて、満開の美女となり、その掌には、豊穡を象徴するオレンジがくるくるとまわっている。三人一組の恵みの女神の円舞は、天から地、人間へと、そしてまた天へと還る愛の循環、美、愛と喜びがまたひと回りして、円舞したことの証。受肉という恩恵の瞬間において、気高く均衡を保持して腰回りを優雅にひねり、両掌を見事に開いて美、愛と喜びの舞を踊る。衣を鮮やかに彩どる花々は紅い薔薇、矢車草、紫色の堇、勢いよく放たれたかの矢は、遠く、飛び散る花火を一気に目の前に咲かせてゆく。盲目のキューピッドは見えない目を大きく開かせてゆき、煌々たる光の波に、いまや泳いでいる。光輝なる日光に照らされて、突如としてつくられたこの太陽にまで登る道は、一本の太い垂直線によって表現されて、下から上へと登るこの光を凝視することで、いまや両眼は損なわれてゆくまま。天空には、双頭白馬、二頭立ての馬車、無色、無形、不可触の天外へと、天の彼方なるこの場所。少しずつ、すべての形が崩れてゆき、雑然と無差別に、相反発していたものは協和し、異なる種から万物が相剋から生まれてゆく。魂はすべて顔となり、すべて目となり、すべて唇、そして大きな一つの掌。まったく自分を忘れて、はじめて声を聴いた時に、その場に引き合わされて、また強く引き離された人々は、次々に涙を流している。わたし達の想い、情感、感覚、哀しみ、喜び、痛みのすべては、ばらばらなものが一つの形をつくってゆき、結局は最後に分裂してゆく。鷹の翼は折れたまま、その鋭い嘴で土をほじくり返し、蝙蝠、鴉、蜻蛉、蝶は、山川草木

の全宇宙を鳴り響かせる永遠の調和の内に、天上から澄んでいる気が戻り、凝った地は濁っている気として浮上する。無骨な野生、いままで圧されていたものの明るみ、大地の紛糾が、裂けた深淵に共存してゆき、あらかじめ自らを開きつつ、一切を呑み込んでゆくところの開かれたもの。真っ白な五弁の銀梅花はすべての中央にあって、月桂樹はこの渾沌において、声をあげずに語りかけてくる。気がつく、老人はまどろみから若返り、腕に抱えている琴は美しい女として変化している。愛の矢が心に刺さったままの女は、過去に七人の夫に嫁いだが、その度、魂を奪われてしまった。そして心に深い哀しみを覚えて、嘆きに嘆いて悲しみながらも、その嘆きの痛みを身を任せるままに、再び、深い眠りに落ちていった。この美しい女を両腕にかき寄せて、蔦葛を髪に飾って、馬に乗って駆け出していたのである。

わたしに何の喜びがあるでしょうか。わたしは目が見えず、天の光を見ることができないのです。生き ても、もう死人の世界にいるようなものです。思い出することもできません。人の声は聞こえますが、姿は見えません。その声も誰のものかもわかりません。どこか遠くに行かなくてはならないと思うのですが、其処がどこなのかもわかりません。どうぞ、私を連れて道案内をしていただけませんか。

すべての音階、すべての詩、すべての声が響き合って、訪れるのは、あんなにも傷ついた茨の冠であり、一、全がようやく祭礼して成り立つなか、老人も、愛の天使も、麗しい女、白馬も琴も、声をあげて集まってくる群衆の影も、次々に靈感を受けて、涙を流している。すべての想い、心、感覚、哀しみ、痛み、喜びというばらばらなものから一つの形となってゆく、もう振り返ることも、凝視することも出来ないような強い衝撃の中で、まったく目の見えなくなった瞬間に、なんと畏れおおい聖なる受肉が、こうして一勢に口にすることで、おこなわれているという神秘。食されることで、口から入った糧は、吐き出される息としてのいのちをつないでゆく。すべてが充たされるこの新生には、一切の対立は無く、ただ充満されてゆくのみか、否か。





---

イデアIDEA II

---

著 小泉友美 Koizumi Tomomi

制 作 Puboo  
発行所 デザインエッグ株式会社

---